

第3回

竜山石たつやまが

使われ始めたころ

新しい科学の目は、竜山石が採掘され始めた様子についても大きな発見をもたらしました。奈良県や大阪府に築かれた大王の古墳に、竜山石が使われていたことが明らかとなったのです。

今をさかのぼること約一七〇〇年前、人々は竜山石が良質の石材であることを知り、この石を積極的に利用するようになりました。

そのころの日本は古墳時代の真つ最中。人々はたった一人の王のために巨大な墓、古墳を築きました。

当時の人々にとって古墳とは単なる死者を葬るための墓だけではなく、王の死を悼むとともに、様々な儀式を通じて先代の王の権力を示し、それを受け継いだ新しい王を誕生させ、それを内外に広く示すといった政治的モニメントとしての役割がありました。そんな彼らが重視した古墳づくりの中でも、最も中

心となるのが王の棺ひつです。人々は、王のためにわざわざ遠くの竜山石を求め、長い距離を運んだのです。

現在、確認されている竜山石製の石棺せつかんは、最も東側で滋賀県、最も西側で山口県まで運ばれています。その距離は直線にして約三〇〇km。こんな重たいものを

近くもあります。このソリを引っ張るには丈夫なロープを作らなければなりません。安定して引っ張るためには、起伏の少ない道づくりも必要です。河や海を越えるには船にも乗せなければなりません。

このようにして大勢の人々が関わりながら遠くまで石棺を運ぶことは、王の強大な力を示す儀式の場面でもありました。道中はさぞ、にぎやかであつたことでしょう。しかし、当時の様子がわかる具体的な手がかりは何一つ見つかっていません。全く謎のままで。答えは案外、皆さんの足元に埋まっているのかも知れません。

文化財総合的把握モデル事業

ひと・まち・石

問合先 教育委員会
生涯学習課文化財係
☎448-8255

どのようにして遠くまで運んだのでしょうか？その答えは地面の下に埋もれていました。

大阪府の遺跡から重たい物を運ぶためのソリ、修羅しゅらが見つかったのです。Y字形をしたアカガシの一本で作られており、長さは九m



竜山石曳きまつり (平成19年5月)

(兵庫県立考古博物館

中村 弘)